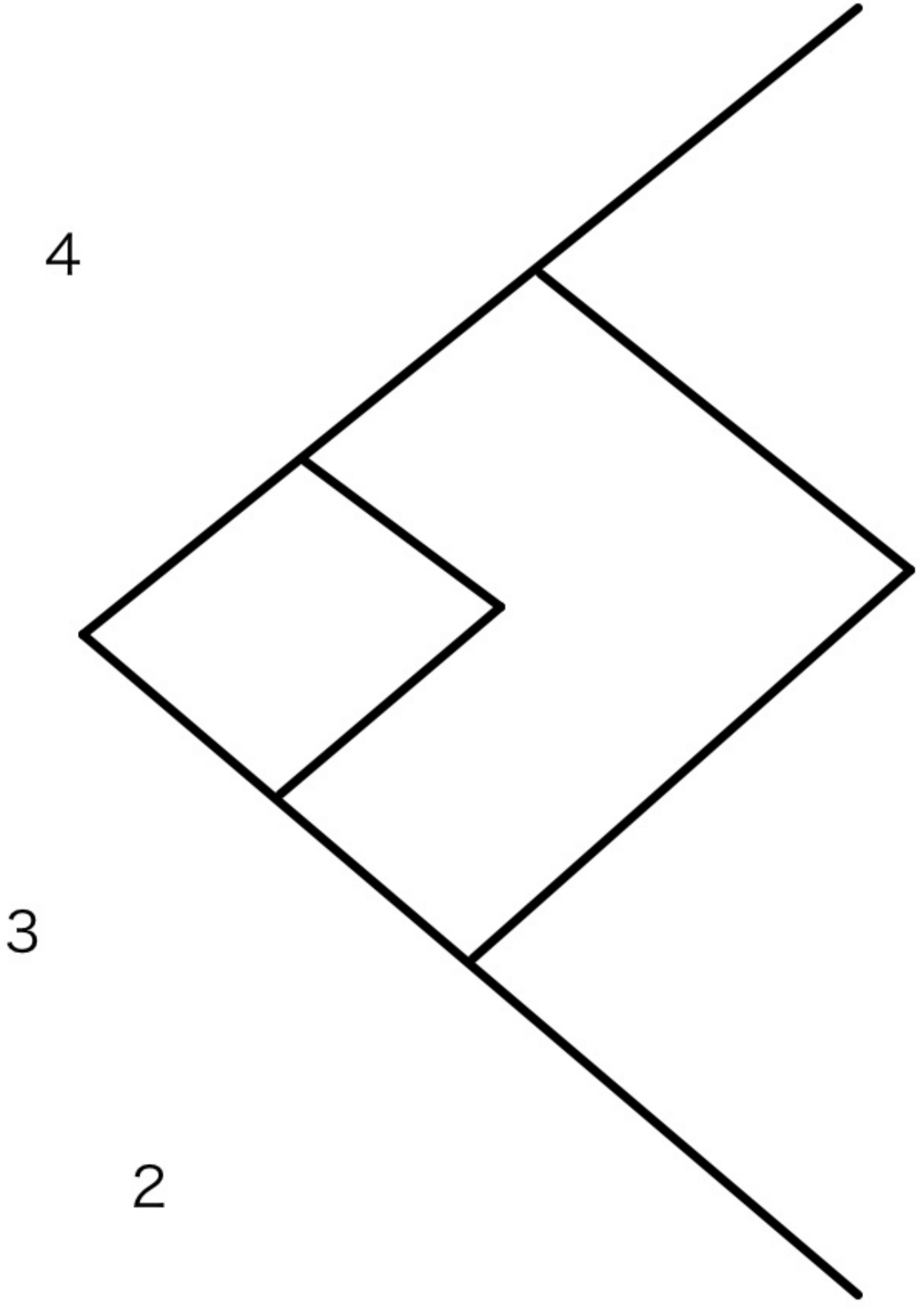

Fumio Kusanagi

黄金の水

図書館に行って、見つけた「本」黄金の水

そして３人でここに行こうと決めた

場所は宇宙のブラックホールを抜けた

テモーリという場所

今はもう宇宙の世界になっている、移動は空になり、いつでも宇宙にいける、だが、人類ではブラックホールへの侵入は禁止されている、今でもブラックホールの謎は解明されていない。そしてそこに入った者は２度と宇宙に戻って来ていないのだ。人間がオゾン層を作り、どこの惑星でも人間は生活している。ガソリンはなくなり、３００時間充電可能なバッテリーがあり、宇宙飛行機はどこでもいけるようになっている。宇宙語が開発され言葉も変わった。本来の母国語と宇宙語これを市民には教育させた。人間が惑星に住むようになって、新しい植物や動物が産まれた。機材や研究機器を運び、今は宇宙研究を進んでいる。それぞれ宇宙の良さがあり、悪さがある。それは誰かの人間の命の表現であると示されているが事実ではない。

僕の名前はコサ、相棒のモヘ、そしてミラ。モヘに黄金の水飲んでみたいと言ったら、飲んでみたいと言っていたので、「行く」って聞いたら「行く」と言ったので、そこから計画は進行する事になった。僕らが図書館で調べていると、ミラが興味を示した。「何やっているの」二人は嘘をついて、食べ物だよと言った。ミラは怪しげに僕たちを見つめる。「嘘でしょ」僕らはドキッとしたが、食べないと生きていけないよねと言った。ミラはしつこく「何の食べ物？」と聞いた。「キャベツみたいな」「みたいな？」「何か今、研究されている、食べ物について、本当に食べれるか調べているんだ」「嘘ね、あなた嘘下手よ」「んー、水でしょ」「いやいや、キャベツだ」「本当の事言って、私も力になるわよ」モヘと相談した。「きっと水を売る事になるな」「ミラは水を見ても飲まない、だから、連れて行っても意味がない」「でも、戻って来れないなら、水持って帰ってきた方が後々いいと思うけど」「死ぬなら、二人で十分だ」「でもさ、もしかして帰ってきた時、証明できる人がいた方がいいと思う」「死ぬかもか、それはあんまり考えていなかった」「どっちか死んだ時、助けになるよ」「そうか、じゃあ、本当の事を話そう」ミラに黄金の水の事を話した。「うっ、あんたら頭悪いわ、その水飲んで何になるの？」「きっと、宇宙が変わると思うんだ」「あんたのせいじゃない、無駄よ、でも、聞いたから」「誰にも言わないで、お願いだから」「じゃあ、口止め料もらうわ」そして、お金をもらったがミラはみんなに言いふらした。「おい、ミラどういう事だ、秘密だったのに、口止め料プラスお前、一緒に来い」「なんか、みんなにこの話したら、頭が痛くなった、それと、その黄金の水になんか

あるわね」「何？」「全ての水とでもいうのかも」「血が水になるのかな」「ともかく、その水に興味が出たから、私も行く事にする」「生きれるかは、わからないけどな」そして三人で研究は進んだ。
僕達は多くの本を読み、ある程度場所は掴んだ。そしてわからなかった。それはブラックホールは何であるのかという疑問だった。僕たちの答えは、宇宙の未来、宇宙の世界だけでなく、宇宙の家はブラックホールの先にあると考えた。という事は、出れるという事、そして、宇宙人に黄金の水を飲ませて帰ってくる。僕たちの任務は決まった。
最後にペンで読んでいる本に線を引いたそこには「０と０を足した時、また０になる」そして僕達は出発した。

二時間かけてブラックホールまで来た。ボタンを押して通信した。「さて、もう戻れないかもしれない、僕に提案がある、今、僕のメールボックスにメールを打ってくれ」「遺書ね」「部屋に遺書を残した、そこにアドレスとパスワードを残した」「わかった」。「どうだ、準備はいいか」「ちょっと待ってくれ、写真残してもいいか？」「漫画か？」「これだけは、捨てられないんだ」「私は遺書残してきたからいいわ」「僕達の予想だとここが入り口だ、機体を結ぼう」「答えを知ると、答えが返ってくるわね」「どちらさまだ」「行くぞ」三人はブラックホールへ進んだ。僕には虹の色がゆくっり流れているように見えた。そこに台風と雷が混じっているような時折、何かの種がこっちに当たって、宇宙へと繋がりを感じた。そして、死という恐怖に打ち勝った気がした。
そして、次の第二宇宙へと移った。僕らの計算だと二時間は進まねばならない。太陽の光はなく、レーダーで場所を感知する。僕達は僕らの指定した場所まで、みんなで歌を作ろうと決めていた。それを友達に送信して、今僕達はどこにいるんだろう？というのと、恐さから逃げる為にもこの方法をとった。題名は「マジックナンバー」となった。そして指定の場所に着いた。やはり、惑星はなく、ここからが動きある宇宙という生き物の捜索である。「どっちだ？」「計算によると下にあると推測する」「右２０度下プラス５度」「俺も下と判断する、３０分進んでみよう」下に行くと惑星がいくつもあった。近くに太陽の小さな惑星もあってライトはつけずに済んだ。「この近くだ」「だた、どの惑星だ？」「地球に似てる惑星よ」「そうか？」「いや、違う、地球の近くにある月に似た惑星だ」「月と判断する、方向転換、小さな太陽に向け進む」僕らが住んでいた、地球とは似ていなかったが、何かのバランスで保たれている事は発見だった。そして星は二つ輝いていた。そして僕らは見つけた。「あった、あれね」「ああ、あれだ」そこは丸く中心が中に入っている惑星だった。そして緑色に輝いていた。色は違っていたが、推測どうりだった。そしてそのまま中心の中へと入っていった。そうすると惑星が上に向き色が変わった。土の惑星になり、木が成長した。そして僕達は中心の奥へと宇車を止めた。「ここは空気があるわね」「測定器も空気はあると判断してる」「想定外だな、ここに黄金の水は存在すると思ったが、ここは入り口のようだ」「ドアがあるわ」「ここから探せって事だろ」「食料だ、小さな惑星だが、三日はかかるぞ」「私の予想だと、ここをまっすぐ行けばあるわ」「ここの反対側？」「そう」「いや違う」ドアを開けると、動物達が待っていた。様々なみた事のない動物

達だ。そしてついて来いと言っている気がしたので、ついて行った。そこは透き通った世界で歩く音も心地のいい感じだ。動物達も何か話ているようだった。木が大きくなっていく姿が見れ、花になり、落ち、そしてまた、花が咲くという循環だった。三時間くらい歩いただろうか、滝が流れ、滝壺がある。木々が生え茂り、鳥が鳴いている。そして水は光っていた。「着いた」「ここなのね」「神の聖域」そして人が現れた。「いらっしゃい、何のようだい？」「水をもらいたくて」「その水は、飲まない方がいいよ、動物専用の水だから、飲みたいならいつもの飲んでいる水をあげよう」「それでは、ないんです、この水がいいんです」「勝手にしなさい」「では、飲ませていただきます」三人は黄金の水を飲んだ。そしたら、体中が赤くなり、雄叫びをあげた。「ギョーーーー」そして、ミラがペンギンになった。モヘが白熊になった。なぜかコサは人間のままだった。「モヘどうした」「オゥ」「喋れないのか。おい、ミラ、大丈夫か？」「クゥ」「おい、おばば、どういう事だ」「だから言っただろ、飲まない方がいいって」そしておばばは消えて行った。
そして、モヘはコサへと襲いかかった。モヘは鋭い爪でコサを引っ掻いた。「落ち着けモヘ」そして、動物達の方へと走って行った。ミラはツンツンと足を嘴でつついている。僕は抱き上げた、そしたら離せと言わんばかりに暴れた。離したら動物の方へと行った。そして思った。なぜ僕は動物ではないんだ？まさか、モヘやミラから見れば動物だったのかもしれない。いや違う、僕の手は人間だ。黄金の水に顔を写してみると、黄金の水は輝きを失い、僕の顔が見れた。人間だ。なぜ僕だけ。そしておばばはどこかにいると思って探す事に。木々が悪魔に変わり、動物達も悪魔に見えた。花は異臭を放ち。空が真っ黒だった。おばばの分身はそこら中にいた。「どこだー」一匹のうさぎが現れた、表情は悪魔ではない。ついて来いそんな感じだ。そこにはうさぎが何か食べている。そして目を光らせたうさぎは僕を食べようとしてきた。僕は逃げた、そしてうさぎは早かった。僕はナイフを取り出し。うさぎは大きくなった。前歯で首を何回か噛まれ、心臓部分を刺した。倒れたうさぎは言った「ここからは逃げられないよ、なぜ君だけ」周りのうさぎは逃げた。「おい、うさぎ、お前、治療してやるから、おばばの場所を教えろ」「黄金の水に連れていけ、そうすれば治る」「小さくなれるのか？」「お前な、殺そうとした奴によくそんな事が言えるな」「俺は殺す気なんてなかったからな」「お前に道案内を頼みたい、じゃなきゃ殺すぞ」「俺はな、もう死んでんだ」「諦めるな、こうして生きているだろ」「お願いだ、助けてくれ」「道案内を頼んだ」うさぎはぐったりしていた、死にそうだった。むしろ死んでいた。そして黄金の水を飲ませると生き返った。「ありがとな兄ちゃん」「って事は死なないのか？」「ここでは永遠だ、仕方がない、おばばの場所を教えるよ、ついて来な」一時間くらい歩いた。そこでうさぎは言った。「ここは守られていて、もう次はないんだよ」「やはり、飲まなければよかった」「心の傷は消えない、そして、儚く消えて行くもんだ」「現実で夢があればここもきっと夢の中だ」「それは違うんだ、自由ほど決まらないって事」そして、おばばの家に着いた。「待ったわよ」「待てないんだよ」「待てかい？」「戻す方法を教えて下さい」「じゃあ、私の質問に答えておくれ」「はい。」「なぜ、この水を選んだんだ？」「生きてる力になる、最後の水だと思ったからです」「ふむ、もう飲まないのかい？」「みんな飲むでしょう、そして、再びこの水に憧れます。」「私だよ、私は飲んでないよ、一度もな、そして、なぜ、君は動物

にならないのかい？」「僕何となく、思ったんです。水の逆を家で飲んで来たんです。それで、きっと仲間は戻ります。」「ほう、それは何だい？」「涙」「なかなかやるね」「仲間には、捕まえて、自分の涙呑ませれば治ります、それも想定内です、ただ、あなたが涙を飲む、そうするときっと世界は救われる、それを僕の前で泣いて、飲んで下さい、それが僕が計画した、本来の目的です。」「わーかったよ、しばし、一人にさせてくれ。」僕は庭を掃除した。椅子を拭いていると惑星が多くなって、木々が小さくなり、花が枯れなくなった。「おばばメ、泣いたな」
動物達は人間に戻り、仲間も人間に戻った。
おばばが言っていた。「また、来いよ。」

僕達は一つ惑星に寄って地球へ帰った。

Fumio Kusanagi.